

University Academic Repository

『日本軍兵器の比較研究』, 三野正洋著, 光人社,
1997年5月発行, 1900円, 260ページ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 安里, クラタ, アンリ, Kurata, Anri メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/41

『日本軍兵器の比較研究』

三野正洋 著 光人社

1997年5月発行 1900円 260ページ

倉 田 安 里

1. 著者紹介

著者の三野正洋氏は、昭和17年千葉県生まれ。昭和40年、日本大学理工学部を卒業後、造船会社に於いて機関開発に従事。昭和42年、日本大学生産工学部勤務を経て現在同大学教養・基礎科学教室専任講師となっている。専門は物理教育と空気力学であるが、現代史をフィールドとして軍事関連の著書を多数著しており、兵器研究、軍事作戦研究に関するものも多く、軍事史専門家の世界でも評価されている。特に、その経歴を生かした、兵器の科学的分析、検証方法には特筆すべきものがある。

軍事史の検証には、その「営為」と「所産」という見地から、「戦略思想」、「戦術思想」、「兵器開発」、「作戦指導」、「戦争経済」、「国際政治」等、数多くの面からの研究方法があり、実際そのような関連の研究は枚挙に暇がない。しかし、これ等の見地以外に、文化的側面から軍事史を検証したものはあまりなく、帯にも明示されているが、「比較文化論」として軍事史、特に兵器を扱った研究者としては、日本でも希であるといつて良いであろう。

2. 内容の構成

本書の内容は以下のような構成になっている。

第一部 海軍の艦艇

第二部 航空兵器

第三部 陸上戦闘兵器

第四部 戦闘車両

第一部は戦艦、航空母艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦、その他の艦艇及び主な搭載兵器について、第二部は大戦前期及び後期に分けて単発戦闘機、双発戦闘機、双発爆撃機、急降下爆撃機、艦上攻撃機、単発爆撃機、偵察機、飛行艇及び水上機、第三部は小銃、機関短銃或いは短機関銃、機関銃、迫撃砲、火砲、野戦砲、対戦車砲、対空火器、その他の野戦用火砲／兵器、第四部は軽戦車、中戦車、重戦車、その他の軍用車両となっている。

また、第一部から第三部までは、冒頭に「序論」として時代考証や開発の背景、用兵思想等が簡潔ではあるが述べられており、またそのほとんどに「結論」としての全体的検証、更に第三部には総括も記されている。

それぞれが、主として兵器の性能諸元を中心に進められており、比較対象となるのは第二次世界

大戦に於ける交戦国の、実際に太平洋戦線で使用された兵器である。また、著者の専門である技術系からの検証として、カタログデータがふんだんに使用されており、比較一覧表も34カ所にものぼる膨大な記述がなされている。

各部それぞれが一つの論文ともいえる充実さであり、それによって本書が単なる兵器カタログ的なものではなく、「日本兵器の文化的特質」の集大成であることが伺える。

3. 日本軍の戦術の歴史と兵器の特徴

著者が本書に於いて指摘するものの主流である、「日本軍兵器の比較検討による欠点」とは、いったいつ頃からその端を発しているのだろうか。

日本軍の兵器は、当初欧米のその模倣から始まった。明治の健軍以来、陸軍は薩摩藩を中心に、主としてフランスから、海軍は長州藩を中心に主としてイギリスからその組織構成、命令系統、軍学校、そして兵器を真似、「デッドコピー」ともいえる即席近代軍を編成した。後に陸軍は普仏戦争によるドイツの勝利からドイツ式に転向するが、それは陸戦に於ける戦術が主であり、命令系統、組織等はフランス式をそのまま踏襲している。

ここで問題となるのが、「用兵思想」、「戦術」の要請から来る「兵器開発」であり、またその「兵器開発」は実戦での経験を踏まえて初めて改良を始めるという、日本独特の技術開発の流れである。

日本は近代的な軍の創設後、日清、日露の両戦争を経験し、それによって戦術の要諦であるマニュアルを作成した。陸軍に於いては「作戦要務令」、海軍に於いては「海戦要務令」がそれである。

いずれも、日清、日露の両戦役を分析し、将来の戦争に対していかに軍を運用するか、戦術を実施するかが記載されているが、その大半は勝ち戦の例と将来予想される戦争に於いて、「同じ戦術思想でいかに作戦を立案するか」ということと、「そのために軍備をどのように整備するか」に焦点が当てられ、負け戦、すなわち苦戦を強いられた教訓に対する今後の改善策についてはあまり触れられていない。

また、第一次世界大戦に於いて、日本は連合軍として参戦したとはいえ、大規模な戦闘を全く経験しておらず、わずかに中国大陆でドイツ陸軍との局地戦、地中海で海上護衛戦を経験したに過ぎない。この時間的ギャップは太平洋戦争に中国・ビルマ方面を含めた、いわゆる大東亜戦争に於ける兵器開発に大きな落とし穴を作ってしまったのである。

日本の経験した戦争と戦術の時代趨勢

戦 争	年 代	兵器・戦術の転換又は新規参入
日清戦争	1893年～	戦艦による海上決戦、歩兵中心の塹壕戦
日露戦争	1903年～	戦艦による海上決戦、機関銃の実戦使用、要塞戦その他
第一次世界大戦	1914年～	航空機、戦車の実戦使用、機動力の強化その他
日中戦争	1937年～	対ゲリラ戦、塹壕戦、歩兵による呐喊その他
大東亜戦争	1941年～	諸兵器の技術革新、国家総力戦

このうち、第一次世界大戦は前述の通り、日本はほとんど最前線での戦闘を経験しておらず、日中戦争は、日清、日露の両戦役の際の教訓を生かした形での戦闘、つまり、陸軍に於いては塹壕戦、歩兵による白兵戦が主流となっており、海軍では揚子江等の大河を遡ることのできる喫水の浅い小規模の砲艦による戦闘に留まっている。但し、陸・海軍共、航空兵力の大規模投入と、新戦術が要

請する技術革新には敏感に反応し、大東亜戦争に際し、（あくまで偶然ではあるが）それなりの布石を打ったことになる。

その他、ノモンハン事変に於いて、ソ連機甲部隊との戦闘により日本軍戦車隊が惨敗したにも拘わらず、それを「戦訓」として生かさなかったのは、「事変」そのものの表記通り、多大な犠牲者を出したにも拘わらず、単なる「局地戦」としてしか認識されなかったことと、航空部隊の圧倒的強さにより、緒戦の「勝ち戦」による戦訓の研究と、それに伴う兵器のより一層の発展が後半の「負け戦」の反省を大きく凌駕してしまった為であろう。

つまり、日本は明治時代の日露戦争から先、実戦に於ける兵器の近代化を経験していないに等しいといえる。著者もその点は記述の各所で同じ検証を行っている。

4. 比較内容と著者の意図

本書では、兵器のカタログデータを比較検討し、大東亜戦争に於いて日本の兵器がどのような位置付けにあったかを述べているが、その裏には、著者なりの戦争観、文化史観が含まれていると思われる。

通常、一度の戦争を経験すると、その戦訓を取り入れ、更に次に起こるであろう戦争の準備の為に技術開発、用兵思想の改善を含めた「国力」の増強に10～20年にかかるであろう。

第一次世界大戦を本格的に経験しなかった代償として、日本軍は以下の点に於いて「戦争の近代化」に乗り遅れたといえる。

① 陸軍

- a) 地上部隊の機動力の変化
- b) 戦車の用兵上の位置付け
- c) 機甲部隊の威力
- d) 小火器の発達
- e) 海上輸送の重要性

上記の各点について、本書では次のような指摘を行っている。

火炮に於いては、装輪の大半が木製または金属製で、接地面に帯状のゴムを張っただけのものであり、わずかに一式機動47ミリ速射（対戦車）砲のみが空気入りゴムチューブを装着していた。また、懸架装置も甚だ貧弱で、これは、移動の際馬匹牽引を主体としていた為であり、後にトラクターで牽引するようになって、その最高速度を半分以上に制限したとなっている。これでは近代戦に於ける兵力の迅速なる機動に対処できるはずもない。

また、欧州戦線に初めて登場した戦車についても、当初は歩兵の直接支援という役割に準じていたものの、イギリスのフーラー、マーテル、ハート、フランスのドゴール、特にドイツのルンテシュテット、マンシュタイン、グデーリアン等をはじめとする「戦車戦」の先駆者達の主張を取り入れず、日本の「中戦車」が、アメリカの「軽戦車」に対抗できない場面も開戦当初からあった。更に、相応の火力と防御力を備え、兵員輸送車に乗った「戦車を直援」する歩兵を伴う「機甲部隊」の編成、対戦車火器の威力の貧弱さ、新規開発等には全くといってよい程感心をはらっていない。

歩兵用兵器についても、明治38年に制定された、いわゆる「三八式歩兵銃」が大半で、後に「九九式短小銃」という、三八式の使用弾丸の口径を増大させ、威力を増した銃を供給したものの、結局はその程度が限界であった。小銃に関しては、その需要が膨大な数に上るため、第二次世界大戦中、歩兵のほとんどが自動小銃を携行できたのはアメリカ軍だけであるが、その他の軍隊に於いては短機関銃等でそれを補ったのに対し、日本ではほとんど無視されている。わずかに、ドイツの「ベルグマン短銃」を基礎に設計した100式短機関銃が装備された例もあるが、全体の割合からみて全く戦況に寄与できなかったとみて間違いない。

海上輸送については、海軍の影響もあるが、太平洋戦争開戦前、首相であり陸相でもあった東条英機が、その重要性を全く認識しておらず、第一次世界大戦に於けるイギリスの船舶損失率から算出した損害予想を海軍が提出した際、そのまま鵜呑みにしてしまったことから、陸軍の失策であったともいえるであろう。

また、本土防衛の主担当が陸軍でありながら、当時日本領であった台湾や南洋諸島の委任統治領との海上交通路を保護する目的の航空機開発も、航空部隊も編成せず、もっぱら海軍まかせとしていたことも容認できない事項であるといえる。

② 海軍

- a) 艦隊決戦思想
- b) 海上護衛の重要性
- c) エレクトロニクス兵器の開発
- d) ダメージコントロールの必要性

日露戦争に於ける「日本海海戦」の圧勝により、海軍内部に於ける戦闘の要諦は一にも二にも「主力艦による海上決戦」であった。主力艦とは艦種でいえば戦艦のことである。つまり、巨大な戦艦に大口径砲を搭載し、敵の主力艦をアウトレンジから一気に撃滅するという「戦術思想」が主流であり、他の兵器を、主力艦同士の海上決戦に持ち込む為の「補助的兵器」と位置付けてしまっていた。確かに、第二次世界大戦勃発当時は、各国とも戦艦の保有数と個艦の性能イコール海軍力と見ていたふしがあるが、日本海軍に於ける「海戦要務令」の失敗は、敵を迎撃することであり、太平洋に於ける戦線の拡大は考慮に入れていなかったことである。これもまた、日露戦争までの海軍戦術の踏襲であり、長駆侵攻、補給に関してはほとんど省みられなかった。

また、潜水艦も上記の艦隊決戦に於ける、敵の「漸滅」を目的に設計・運用され、アメリカの潜水艦部隊に比して、その戦果はあまりに僅少である。

陸軍もそうであるが、特に海上という、目標物のない戦場でのレーダーをはじめとしたエレクトロニクス兵器の開発も遅れ、むしろ研究そのものは陸軍の方が先行していたという皮肉もある。ダメージコントロールに関してもそうであるが、攻撃最優先になったばかりに、防御、または応急といった思想も貧弱であり、日本の空母の脆弱さに比してアメリカのそれは非常に強化されており、戦果判定に重大な影響を与えた例も戦史の随所にみられる。

5. 総評

総じていえば、本書は「兵器の比較研究」でありながら、同時に「思想比較」、「工業技術比較」、「民族文化比較」という、総合学問的な内容たる一面も持ち合わせている。もちろん、本文の中にそれ等が明示されているわけではないが、周辺学問との対照により、本書の内容の価値は何倍にもなるであろう。

惜しむらくは、以下の点に於いて今ひとつの記述を加筆して頂ければ、より完成度の高いものになったのではなかろうか。

①戦艦、空母のより一層の細分化

日本の戦艦は、大東亜戦争に於いては一艦種となったが、それ以前は巡洋戦艦として区分されていた（名称が「大和」「長門」のように旧国名であれば戦艦、「金剛」「榛名」のように山名であれば巡洋戦艦）。また、空母は戦艦改造型の正規空母、設計当初からの正規空母、他艦種からの改造または改装空母（一般商船を含む）、設計当初からの軽空母（日本では「補助空母」と呼称した）等、建造に於ける分類と、攻撃型空母、護衛空母、輸送用空母、アメリカに於ける練習用空母等の運用面での分類を明確にする方がよかったのではないか。

②潜水艦に於ける「波号」クラスの紹介

排水量300トン程度で、戦争末期には輸送用として建造され、実戦による記録も伊号、呂号に比してさほどではなかったものもあるが、歴史も古く、総数もそれなりに保有していた波号潜水艦も紹介するに値するであろう。

③航空機、特に戦闘機の各型式による性能差の紹介

例えば、「零式艦上戦闘機」ひとつとっても、初期の11型から末期の63型まで、その用途だけではなく、性能もかなりの開きがある。また、比較される他国の航空機に関しても同様であり、今少しバリエーションを増やすべきではなかったか。

④戦車以外の軍用車両のより一層の充実

九四式軽装甲車のように、日本では装甲車扱いであっても、アメリカでは「豆」戦車とされているような車種をより明確に比較してみてはどうであろうか。イギリスのブレン・ガンキャリアーの例もある通り、日本独特といえるものばかりではないはずである。また、小松式牽引車や烹炊車、幕僚車、單車、側車についても記述が欲しいところである。

⑤電波兵器、光学兵器等の紹介

電波警戒機、電波探信儀等のレーダー機器、逆探、磁気探知機等のエレクトロニクス兵器、砲隊鏡、測距儀、写真銃、双眼鏡、照準眼鏡等の光学機器も兵器として非常に重要であり、これらの性能によって、戦艦その他の兵器の運用法や実績が左右されたことを鑑みると、やはりこの分野の欠如は非常に惜しまれる。

これ等を1冊に纏めるのは到底不可能であり、著者はより多角的な面から「日本軍小失敗の研究」と「続・日本軍の小失敗の研究」という高著を著されており、特に改訂された文庫版が発行されているので、これ等を併せて総合的に検証すれば、筆者の指摘に対する回答も得られ、非常に完成度の高い資料となることは間違いない。しかしながら、やはりそれでも、当時の国力、用兵思想、開発思想、技術水準等からみられる「兵器全般」の比較検討は、軍事史のみならず、工業史、文化史等の研究者からも今後も待ち望まれるものではなかろうか。著者の研究の益々の成就を祈念して止まない。

(平成13年11月1日受理)